The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラムの女性が語るライフヒストリー(3)-5
Author(s)	井戸根, 綾子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2023, 34, p. 88-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91116
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』34 号（2023）pp.88-104

ラムの女性が語るライフヒストリー（3）－5
Life History Narratives of Women in Lamu (3) - 5

井戸根　綾子*
IDONE Ayako

0.　はじめに

筆者はこれまでケニア・ラム島に生きる女性へのインタビューを重ねており、彼女たちのライフヒストリーを個人ごとにまとめ、日本語訳を加え解説を補足することに取り組んでいる。またその取り組みの中で、女性自身の語りと文化的・社会的背景との関連性に目を向けることを試みている。別稿では調査協力者 C 氏と D 氏のライフヒストリーを紹介している（井戸根 2012、2015、2016、2017、2018）。本稿の調査協力者 E 氏のライフヒストリーはすでに井戸根（2019、2020、2021、2022）において紹介しており、井戸根（2019）では彼女の祖父母、両親、育ての親について、井戸根（2020）ではきょうだい、少女期に受けた教え、夫とその家族についての語りを取り上げた。E 氏のライフヒストリーの中で婚礼行事に関する語りはもっとも分量が多く、井戸根（2021、2022）では、求婚、結婚契約式、新婦のお披露目、床入り、婚礼行事での歌や踊りといった内容を紹介した。本稿では夫との結婚生活と出産に関する語りに焦点を当て、各々に小見出しを振り分けて紹介する。

1.　調査および調査協力者 E 氏の背景

本稿に関わる聞き取り調査を行ったのは、ケニア共和国の沿岸北部に位置するラム島の中心地ラム（Lamu）である[1)]。第一次調査は 2003 年 8 月～10 月に、第二次調査は 2004 年 12 月～2005 年 2 月に行い、補足として第三次調査を 2017 年 3 月に行った[2)]。調査地ラムの主な概要は井戸根（2012）を、本稿において登場する地名については井戸根（2019）を参照されたい。

本稿との関連から、井戸根（2019、2020、2021、2022）において語られた E 氏のライフヒストリーを簡単に紹介する。

---

* 大阪大学外国語学部非常勤講師（School of Foreign Studies, Osaka University）

1) 第一次・第二次調査時のラムは行政上、コースト州（Coast Province）ラム県（Lamu District）アム郡（Amu Division）に属していた。しかしケニアでは 2013 年に行政区分としての州・県・郡が廃止され、47 のカウンティを地方行政の中心単位とすることが導入された。現在の行政区分はラム・カウンティ（Lamu County）ムコマニ区（Mkomani Ward）となる。なお各カウンティの領域は、一部を除いて旧行政区分の各県とほぼ一致する。

2) インタビューは調査協力者 E 氏の自宅で筆者自身がスワヒリ語によって行った。録音したインタビューを書き起こした後に E 氏本人に内容を確認し、一部補足説明を受けている。

E 氏の年齢は 2003 年の自己申告によると 40 歳代である。E 氏の両親や母方および父方の祖父母さらに育ての親である女性はいずれも、ラム島の北に位置するパテ（Pate）島中央部の漁村シユ（Siyu）の出身である。E 氏とその家族、ラム島とパテ島の住人の大多数がムスリムである。

E 氏の母方の祖父は妻子を残してシユを離れ、タンザニア連合共和国のペンバ（Pemba）島ではクローヴ[3]関連の仕事に、ザンジバル（Zanzibar）島では漁業に従事した。その後、祖父はマフィア（Mafia）島の女性を妻に迎え子どもを 4 人授かる。祖父が亡くなった際は、E 氏はきょうだいとともにマフィアを訪れて喪に服した。

E 氏の母方の祖母は祖父と離婚し別の男性と再婚した。その夫に先立たれた後は、E 氏の母親のもとに身を寄せ一緒に暮らした。

E 氏の母親は 18 歳の頃、船造りの職人である E 氏の父親と結婚する。両親はシユで結婚した後にモンバサ（Mombasa）に移り住み、E 氏が長女として誕生する。生後 2 ヶ月目に入ると E 氏は親戚にあたる女性に引き取られ、ラムで養育される。そのため E 氏が両親と生活をともにした経験はほとんどない。一方で、E 氏の後に誕生した 10 人のきょうだい（弟 6 人、妹 4 人）はモンバサの両親のもとで育った。第一次調査時には 3 人の弟と母親がすでに故人であった。未婚の妹 2 人と暮らしていた父親は、第一次調査時と第二次調査時の間に亡くなっている。

E 氏の養育者である女性には当初夫がいたが、E 氏の養育期に離婚しその後再婚することはなかった。彼女に実子はいなかったが、E 氏の父親を育て上げており、さらにその娘である E 氏も養育している[4]。この女性は長年にわたり行商を行い、自らの収入を得ていた。

初潮を迎えると、E 氏はソモ（somo）[5]と呼ばれる年配の女性から生理への対処法を学んだ。この女性はその後も E 氏に対して性教育を施す役割を担い、E 氏が結婚を迎える頃には性交渉に関する手ほどきも行った。

彼女が結婚を迎えたのは 10 歳代の前半である。結婚相手である男性（以下、夫）と

---

[3] 和名では丁子。開花直前の蕾を摘み取り乾燥させた後、料理の香辛料や鎮痛剤などの生薬として使用される。クローヴは 19 世紀初頭にザンジバルにもたらされ、その後農園の拡大とともにインド洋交易の主力商品へと成長した（富永 2001:109-110）。1872 年にザンジバルのクローヴがハリケーンによって壊滅して以降、ペンバが主産地として台頭する（富永 2001:200-201）。

[4] このことから、E 氏は養育者の女性のことをある時には「祖母」、またある時には「母」と呼んでいる。本稿での E 氏の語りの中で「祖母」および「母」と称されているのは同一人物であり、いずれも養育者の女性を指す。

[5] 東アフリカで初婚前の娘に対して性教育を行う女性の存在については多くの文献で言及されている（シュトローベル 2006、富永 1994、2001、Brunotti 2005、Fair 2001、Fuglesang 1994、Larsen 2008、Le Guennec-Coppens 1983、Middleton 1992、Mirza and Strobel 1989、Stiles and Thompson(eds.) 2015、Strobel 1979、Timammy 2010）。ラムではソモと呼ばれる女性がその役割を担い、複数の少女が参加する集団に対してではなく個人的に教示を行う。

その父親はキウンガ（Kiunga）地方のルブ（Rubu）、母親はファザ（Faza）[6]の出身である。夫の父親は農業と漁業で生計を立て、長老会議（mzee wa mui）[7]のメンバーとして地域の相談役を務めていた。キウンガで暮らしていた彼らだったが、ソマリ[8]の人々の影響を受けラムに移り住むことを余儀なくされた[9]。

タンザニアのダルエスサラーム（Dar es Salaam）で働いていた夫がラムに帰省した際、幼い頃から知る E 氏の成長した姿を見初めて求婚をした[10]。E 氏は一般的な額の約 3 倍に相当する[11]婚資を受け取り、さらに結婚生活に必要な品々も贈られた。養育者の女性は E 氏夫婦の住まいとして自身が所有していた家を提供し、調理器具やアクセサリーを E 氏に贈った。

1 日を費やして婚礼行事が行われ[12]、さまざまな歌や踊りが披露された。早朝に結婚契約式がモスクで執り行われ、モンバサ在住の父親や弟たちが出席した[13]。夕方には新郎である夫やその身内の者などの男性が広場で杖の踊り[14]に興じ、その場に E 氏の妹が率いる新婦の女性親族たちが現れ新郎への贈り物を届けた。その日の夜には新婦のお披露目会と床入りが行われた。新婦のお披露目会は E 氏宅近くの広場で開かれ、E 氏は緑色のドレスに身を包み招待客に晴れ姿を披露した。その後 E 氏宅の寝室で床入りが行われ新婦の純潔が証明されると[15]、女性たちによる歓喜の歌や踊りが広場で夜通し繰り広げられた。初夜をともにした E 氏と夫はそのまま寝室にこもり、E 氏の

---

6) パテ島北部に位置する漁村。

7) ラムを含む東アフリカ沿岸部の各地には伝統的な自治組織が存在していた（Middleton 1992:69-82、Prins 1967:92-103、1971:12, 18, 48-60）。

8) 主にソマリア、エチオピア南部、ケニア北部などに居住し、ソマリ語を母語とするクシ系の民族集団。

9) 1963 年 12 月 12 日にケニアはイギリスの植民地支配からの独立を果たしたが、その 2 週間後に政府はケニア北東部に対して非常事態宣言を発令した。この地域のソマリの人々が、ケニアからの分離とソマリアへの編入を求めて分離独立戦争を始めたためである。この戦争はソマリ側の敗北で 1967 年に終結したが、非常事態宣言は 1991 年まで継続された。また 1977-1978 年にはソマリアとエチオピアの間でオガデン戦争が起こり、その後ソマリアの兵士が武器を持ってケニアとの国境を越えた。盗賊化した彼らは強奪などを行い、地域の治安が悪化した（戸田 2013:82-85、2018:552-554）。事態が収束するまでの間にルブを含むケニアおよびソマリア沿岸部の数々の村が被害を受けて避難民が流出したとされる（Nurse 2010:14）。なお、E 氏の夫の家族の何名かはその後故郷の土地に再び戻っている。

10) 夫との明確な年齢差は不明であるが、「夫は自分の親くらいの年齢だった」と E 氏は述べている（井戸根 2020:26）。

11) E 氏の語りによるものである。

12) ラムでは主な婚礼行事に費やされる期間は 3 日であることが望ましいとされる。ただし両家の諸事情により日程が短縮されることは珍しくない。

13) 結婚契約式はイスラーム法に基づき夫婦間の結婚契約が結ばれる儀式であるが、出席者は男性に限定されている。近親の男性が新婦の後見人として契約を結ぶ。

14) ラム群島では男性による杖を使った踊りが数種類存在する。杖は刀剣を模していると言われ、婚礼行事や宗教的な催しの場で行われる（Franken 1986、Gearhart 1998、Olali 2008、Senoga-Zake 2000、Skene 1917）。

15) 女性は初婚を迎えるまで純潔を守るべきであると考えられている。

女性親族などから食事の世話を受けながら数日間過ごした。

2. E 氏のライフヒストリー

本稿は、基本的に井戸根（2019、2020、2021、2022）の記述形式に従っている。個人名はすべて仮名とし、アルファベット一文字にて表記する。また個人の特定を避けるために、必要な場合には町区などの地名についてもアルファベット一文字にて表記する。実際のインタビューでは E 氏のライフヒストリーがすべて時系列的に語られたわけではない。第一次調査時と第二次調査時に聞き取った語りをあわせた上で筆者が若干の編集を行い、内容に沿ってそれぞれ小見出しを設けた。2.1 は原語であるスワヒリ語での記述であり、2.2 は日本語訳に適宜註を付けたものである。

2.1. 原語（スワヒリ語）

調査協力者 E 氏がインタビューの際に使用しているスワヒリ語にはいわゆる標準スワヒリ語とは明らかに異なる発音や語彙が見られる。しかし同一の単語において、時によって標準スワヒリ語の発音が現れる場合とそうでない発音が現れる場合がある。この現象は語彙に関しても同様であり、標準スワヒリ語の語彙とそうでない語彙が、同じ意味を表すのに混合して使用されている。E 氏は人生の大半をラムで過ごしており、彼女が会話において基本とするスワヒリ語はラムで培われたものであると推測される。しかし E 氏の主な養育者である女性がシユ出身であることから、シユで使用される変種の影響も否めない。またケニアやタンザニアの複数の場所での生活経験がある E 氏の夫からも、何らかの言語的な影響を受けている可能性がある。さらに聞き手である筆者が理解しやすい標準スワヒリ語も時には使用していたと考えられる。E 氏は数種類のスワヒリ語変種を混合して用いていたが、ここではそれを単に「スワヒリ語」と呼ぶ。その表記については標準スワヒリ語の表記法に従っている。

2.1.1. Kukaa na bwana’angu

Tukishakufanya harusi, nikatoka kule nikakaa na bwana’angu nyumba hini hini. Tukakaa na bwana’angu, maisha yake hivohivo halafu bwana’angu pia nae akasafiri. Akishakunioa mwezi wa pili, akaenda zake Tanzania peke yake. Akaondoka kwanda akaenda zake Tanzania akafanya kazi hoko maanake nduu yake mwingine alikuweko hoko.

Bwana’angu kazi yake alikuwa akiuza samaki, wale waitwa omena na perege. Omena ndiyo samaki aitwa hivo ina lake, wale Wajaluo wakifanya biashara, wenyewe wapika. Kule alikuwa akifanya kazi kule Tanzania. Kuna mahala pamoja kule Tanzania, kunaitwa Nyumba Mungu. Akitoka hoko Dar es Salaam, akienda, kuna mui mmoya huitwa Nyumba Mungu, akitukua halafu akapeeka Zambia samaki. Ile samaki ya mai baridi waitwa perege, akitiya

matengani akipeeka Zambia kwa roli. Akitiya marolini matenga yale makubwa, yakitengenezwa kwa ng'ongo yale, akipeeka vile hoko Zambia, ndiyo kazi yake.

Mimi nikabakia hapa hapa Lamu na bibi yangu. Nikawa ninapika hapa halafu nikaenda nikapeeka chakula kule. Maisha ni hivo hivo si mabaya. Halafu akaya Lamu. Alipokuya akanambia.

'Afadhali sisi twen'zetu. Mwate mama akae mwenyewe.'

Basi nikamwambia twende. Halafu mwezi wa tatu tukaondoka hapa akanitukua tukaenda zetu Dar es Salaam. Tukakaa Dar es Salaam. Tulipopata mwezi wa sita kuolewa, tukampata ntoto. Nilipoenda kule, sikuwahi kukaa. Kwenda tu, nikashika mimba, N, nkubwa wake M, yule aliyoko Mombasa. Nikarudi zangu hapa nikakaa na bibi yangu. Tukakaa mpaka mimba ikawa kubwa. Bwana'angu uko hoko hoko, mimi nilikuwa nakaa hapa hapa. Bwana'angu akaa hokoo, kisha alinitumia pesa. Na zile pesa zilikuwa hazitumiki huku. Ukipata za Tanzania, lazima u*change*. Akibadilisha vile, aliniletea kwa posta, maisha yakaendelea hivohivo. Bwana'angu alikuwa henda pengine akikaa nyezi sita halafu akiya. Tena tukaishi hivo hivo.

Bwana'angu kazi kule mashaka mashaka, shida moya kwa mbili. Dar es Salaam ikawa maisha si mazuri tena kule. Basi akaondoka kule akaja zake hapa, akaregea hapahapa Lamu. Alipokuya hapa, hayaendi mazuri. Akawa hapa Lamu, anaendelea na kazi yake, akawa anabeba mizigo pale pwani hapo. Akawa anafanya kazi ya hamali tuseme kazi ya kubeba mkokoteni hini mizigo. Tukipata siku, tunapika tunakula vizuri. Siku ingine shida shida.

Na ule bibi yangu alikuwa ameatana na bwana'ake. Wakaatana akaenda zake. Alikuwa afanya biashara mwenyewe bibi yangu nikwambiavo. Tumekaa hapa hapa na bwana'angu lakini ndiyo hivo. Huenda pwani siku ingine apata miya mbili miya tatu. Siku nyingine huenda sipati hata shilingi ishirini. Kama hakuna kazi, kukavu pwani, akarudi hivo hivo. Mimi nikienda kwa bibi yangu, nikienda namwelezea.

'Nisaidie.'

Nikapata riziki yetu tukale hivo hivo. Tumeishi hivo hivo. Mtoto wetu wa kwanda mpaka amepata nyaka saba sasa ndiyo nipate mimba ingine ya kumzaa M. Tumeendelea na watoto, ni hivo hivo nikwambiavo. Siku tunakula siku tunanunua boflo. Nikiangalia taabu, nikasema.

'Mimi hata nisishibe lakini washibe watoto wangu.'

Nikawapatia watoto wangu wakala hula. Tunaendelea na watoto wetu.

2.1.2. Kuzaa

Nilipojifungua, bibi yangu aliyokaa na mimi alinisaidia. Nikashika mimba kule, najisikia ah, namita, natapika, nini. Basi nikaja zangu hapa Lamu, nikamfuata bibi yangu aliyonilea. Nikakaa nae nikalea mimba hivo hivo. Taabu leo siku mbili natapika, sina raha mpaka

nikatukuliwa. Nikaumwa, nikashikwa na utungu siku tatu. Siku ya ine nikatukuliwa nikapelekwa spitali. Nikienda, daktari akinipima akasema,

‘Hoyo lazima tumpasue.’

Nikapasuliwa nikatolewa ntoto kwa yuu, ntoto nsichana. Nikakaa spitali kana siku kumi na mbili hivi, nikaregea nyumbani. Kisha nikiya nyumbani tena, nimekaa hivohivo. Siwezi kukandwa kwa shauri ya ule mshono. Nikawa nina kazi. Nikabandikiwa mai ya moto, nikinawa kwa mai ya moto tu, nikijisafisha hiyau basi. Lakini habari ya kukanda tumbo huwa siwezi, ule mshono mbiti. Napiga ui kidogokidogo, nikinwa supu kidogo ya kuku hivi, kama ya samaki nilikuwa nikinwa. Nikipikiwa wali, zile wali wenyewe twaita mashendea, ule mtee uchemshwe uwe ui ui vile, ndiyo mashendea, halafu ndiyo nikila.

Bwana’angu alikuweko Tanzania. Lakini alipata habari E amejifungua lakini kwa shida. Akasikia nimezaa kwa taabu, nilizaa kwa opresheni tuseme. Nilipasuliwa, sikuweza kujifungua. Na niliumwa siku kadhaa hapa nyumbani. Huwa sizai mpaka nikaenda zangu hospitali. Nikampata ntoto N. Halafu alisikia, alikuya. Kisha nikatoka kwa bibi yangu, nikaja hapa nyumbani, nikakaa nae.

Ntoto wa pili nimekaa taabu taabu hivo hivo, mara ikawa lazima nifanyiwe peresheni nae kwa mwezi wa ine. Nikafanyiwa kwa mwezi wa ine, ntoto wa kiume alifariki hoyo. Nikakaa, nikimaliza nyezi sita, nikapata mimba ya M, ntoto wa tatu. Pia nikapasuliwa hivo hivo. Maradhi yangu tena ikaniendelea, ni hivo presheni tu. Hata yeye bwana’angu akasema,

‘Sitaki tena kuzaa sasa.’

Tukafunga sasa, basi mpaka dakika hini.

Kwa sasa mimi nina nyaka arobaini na sita, saba hivi kwa sasa. Nikiolewa, mimi nina nyaka kumi na, ndipo nilipoolewa. Niliopobalekhe, kubalekhe tu, ile damu yangu haikurudi mimi. Nilipobalekhe, nilipata bwana. Nikipata bwana, ile damu nilipobalekhe tu, sikuiona tena, nikampata N. Ukituona sasa, mimi na yeye tumbo moya. Kwa sababu huwa ni mahirimu.

‘Ule na E ni mahirimu.’

Umezaa na muko sawa sasa. Vile umezaa kwa udogo, huwa ni ntoto wako sasa lakini muko sawa, ni rika moya. Mahirimu na marika ni ntu na nduu yake katika maneno hayo.

‘Jamaa! Marika wale.’

Maana yake vile nimemzaa mimi nikiwa ni ndogo, sasa ukituona tuko sawasawa.

2.2. 日本語訳

日本語訳においては、同じ言葉の繰り返しや言い換えなどは簡単な編集を行い、原語通りの訳では理解しがたい部分については若干の言葉を補足している。

2.2.1. 結婚生活

結婚式を済ませると祖母の家を出て夫と一緒に暮らした。この家でね[16]。夫と生活をして、そのうちに夫もラムを離れた[17]。私と結婚して 2 ケ月目には夫だけでタンザニアに向かったんだ。まず夫が先にタンザニアに仕事に行ったのさ。夫のきょうだいの 1 人がそこにいたもんだからね[18]。

夫の仕事はね、魚を売ってた。オメナ（omena）[19]とかペレゲ（perege）[20]っていう魚さ。オメナってのはそういう名前の魚、ルオの人たち（Wajaluo）[21]が商売で取り引きしたり自分たちで食事にしたりしてる魚だよ[22]。夫はタンザニアで働いてた。タンザニアにニュンバ・ムング（Nyumba Mungu）[23]っていう場所があるんだ。ダルエスサラーム、そこから、ニュンバ・ムングって町があってそこに行って魚を積んで、それからザンビア（Zambia）に運ぶ。ペレゲだとかの淡水魚、それを籠に入れてトラックでザンビアに運ぶんだ。ヤシの葉を編んで作った籠をトラックに積んで、それをザンビアの方に運ぶ。それが仕事だった。

私はラムに残った。祖母のそばにね。この家で料理を作って、祖母のところに届けるようになった。そんな暮らしはそこそこ悪くなかったよ。そうして夫がラムに戻ってくるとこう言ったんだ。

「お前も一緒に移り住んだ方がいい。お義母さんには自分で生活してもらうようにしよう」

だから一緒に行こうと答えたよ。それから 3 ケ月目に一緒にここを発って、夫に連れられて 2 人でダルエスサラームに行った。ダルエスサラームで暮らしたのさ。結婚して 6 ケ月目になると子どもを授かった。あっちに行きはしたものの、住むって感じにまではならなかった。行った途端に身ごもったからね。（お腹にいたのは）N（長女）だよ。M（次女）の姉でモンバサにいる娘のことだ。ラムに戻った私は祖母と暮らし

---

16) 第 1 節で述べた通り、祖母は E 氏夫婦の住まいとして自身が所有していた家を提供した。夫の死後も E 氏は同じ家に住み続け、調査時もその家でインタビューを行った。

17) E 氏の結婚式に出席するために、遠方に住む親族もラムを訪れていた。結婚式への出席を終えた人々はすでにラムを離れており、それに続くように夫も遠方に向かったことを示唆している。結婚前からタンザニアで生活していた夫は、E 氏との新婚生活を送るために一時的にラムに滞在していた。

18) 夫はきょうだいとともにタンザニアで同じ職に就いていた。

19) コイ科の小魚。日本の煮干しに似ているが、ケニアやタンザニアでは煮込み料理の具材として用いられる。

20) ティラピアの一種。

21) ルオ（Luo）は西ナイロート系の民族集団で、ケニア西部またタンザニア北西部に位置するヴィクトリア湖周辺に多く居住する。

22) ラムではオメナのような干した小魚を食する習慣はない。

23) タンザニア北部に位置する人造湖ニュンバ・ヤ・ムング（Nyumba ya Mungu）を指すと思われる。利水、水力発電、灌漑、漁業を目的として、1960 年代後半に完成した（Bailey 1996、Denny 1978）。

た。お腹が大きくなるまで一緒に暮らしたのさ。夫は向こうで暮らして、私はここで暮らす。夫は向こうで暮らして私宛てにお金を送ってくれた。あっちのお金はここでは使えないからね。タンザニアのお金が手に入ったら両替しないといけない。夫が両替をしてから送ってくれて、そうやって生活してた。夫はだいたい 6 ケ月くらい滞在したらまたラムに戻ってくる[24]。そんな生活だったね。

あっちでの夫の仕事が不安定になって、苦労ばっかりでね。もうダルエスサラームでの生活がうまくいかなくなった[25]。それで夫があっちを離れてここに戻ってきた。ラムに帰ってきたんだ。ここに帰ってきたけどうまくはいかなかったね。ラムでは、海辺の船着き場で荷揚げの仕事をするようになった[26]。運搬人の仕事をするようになったんだ。こういう荷車に[27]荷物を載せて運ぶ仕事ってことだ。仕事にありつけてご飯を作って食べられる日もあれば、苦しい日もあったね。

祖母は自分の夫とすでに別れてて、もう夫はいなかった。祖母が自分で商売をしてたのは話したよね[28]。私ら家族は夫とこの家で暮らしてたけど、何しろそんな生活だからね。海辺で 200 か 300 シリング[29]を手にできる日もあれば、私には 20 シリングだって貰えない日もある[30]。もし海辺には何も稼ぎ口がないということであれば、夫は手ぶらで帰ってくる。そしたら私は祖母のところに行って事情を説明するんだ。

「助けてほしいの」

そうやってその日の食い扶持を手に入れて、なんとか食べていってた。そんなふうに暮らしてきたんだ。1 人目の子が 7 歳になると、また別の子を身ごもった。M（次女）を授かったんだ。そうやって子育てをして、あんたに話した通りなんとか生活してきた。ちゃんと食べられる日もあれば、パンしか買えない日もある。苦しい生活の時はこう言ったもんさ。

「自分がお腹いっぱい食べられなくても、子どもたちがお腹いっぱいになってくれればそれでいい」

そうして子どもたちに食事を与えて食べさせる。そうやって子どもを育てたのさ。

---

24) E 氏の夫がラムとタンザニアを行き来していたことを意味する。

25) ニュンバ・ヤ・ムングでの漁業は 1960 年代末から最盛期を迎えたが、1970 年代半ばには生態系の変化や乱獲などにより漁獲量が減少した（Bailey 1996、Denny 1978）。

26) ラムは島の中心地であるため、食料品を含め大陸部から届けられた多くの品が荷揚げされる。荷揚げの作業に就く人々はたいてい日雇いである。

27) 荷車を引く動きを示している。

28) 自ら収入を得ており、経済的に余裕のあったことを示している。

29) ケニアの通貨であるケニア・シリングを指す。E 氏へのインタビューの主な実施時期である 2003 年 8 月、2004 年 12 月の為替状況はともに 1US ドルが約 75 シリングであった。質や種類にもよるが、当時の砂糖 1 キログラムの価格は約 50-60 シリングであった。

30) 夫がその日の稼ぎを手にした後、生活費として E 氏の手に渡る金額が 20 シリングであることを意味している。

2.2.2. 出産

出産のときは祖母が一緒に暮らして手助けしてくれた。向こうで妊娠してからは体調がもうね、悪阻で吐いたり何だりで大変だった。それで私はラムに戻ってきて、育ての親である祖母の所に身を寄せた。祖母と一緒に暮らしてお腹の子を育てたんだ。大変だったね、2 日間吐いたりして気分が悪くてしまいには病院に運ばれるほどだったよ。辛くて 3 日間陣痛に苦しんで、4 日目に病院まで運ばれたんだ。病院に行ったらお医者さんが検査をしてこう言った。

「その方はお腹を切らなくてはいけません」

お腹を切って帝王切開で子どもを取り上げてもらった。女の子だ。12 日くらい入院をしてから帰宅したよ。家に戻ったら安静にしてた。お腹を縫い合わせてるから、マッサージをしてもらうのは無理でね[31]。手間がかかったよ。お湯を沸かしてもらったらそれで手足や顔を洗うだけで、こうやって体をきれいにして[32]終わりさ。お腹を押してもらったりなんてのはできない。縫い合わせた部分がまだくっついてないからね。ウジ（ui）[33]を少しずつ口にして、鶏肉のスープを少し[34]、それから魚のスープを飲んだりしてね。ご飯も炊いてもらったけど、ご飯と言ってもおかゆってやつで、ウジくらいになるまでお米を煮込んだものさ。そのおかゆを食べてたね。

夫はタンザニアにいたけど、「E が出産したけど大変だったらしい」と知らせを受けた。私が苦労して出産した、つまり帝王切開で出産したと聞いたんだ。お腹を切ってもらって、家でのお産はできなかったんだよ[35]。しかもこの家で何日か陣痛に苦しん

---

31) 産後の女性は腹部などのマッサージを受けることで産褥期に子宮から分泌される悪露の排出を促す。病院出産をした場合でも、産婆を自宅に呼び産後ケアを頼むことが多い。

32) 片手ですくい取ったお湯で胸を軽く濡らすような仕草をした後で、そばにあった布を手に取りそれを拭き取る動作をしている。

33) すり潰した穀物や香辛料を煮立てたオートミール状の食べ物。栄養価が高く消化吸収がよいため、朝食あるいは病中・病後や出産前後に食するのがよいとされる。稗、米、小麦、ソルガム、豆類、塩、胡椒、砂糖などが材料として使用される。

34) 鶏肉は牛肉など他の肉類よりも高価であり、頻繁に食することは難しい。

35) 「出産する」という表現をする際、E 氏は*-jifungua* と*-zaa* といった 2 種類のスワヒリ語の動詞を使用している。本稿の日本語訳ではいずれも「出産する」と訳しているが、厳密には両者の意味が完全に一致するわけではない。*-jifungua* は女性のみが主語として使用できる動詞であるが、*-zaa* は男女ともに主語として使用できる。そのためより忠実な日本語訳を求めるとすれば、*-zaa* は「子をなす」といった訳が適していると言える。自身の出産に関する語りの途中で E 氏は使用する動詞を*-jifungua* から*-zaa* に切り替え、自宅出産が叶わず帝王切開による病院出産になったことを「*-jifungua* をできなかった」と表現している。同じような動詞の区別の仕方は前述の D 氏の語りにおいても見られた（井戸根 2017:68-70）。帝王切開による病院出産を指す場合、D 氏は*-jifungua* を使用することはなく*-zaa* のみを使用していた。これは、帝王切開による病院出産は*-jifungua* という行為に含まれないと彼女が考えているからだと思われる。スワヒリ語においてこういった区別の仕方が一般的であるというわけではないが、少なくとも D 氏と E 氏の語りにおいては、自宅出産と帝王切開による病院出産が区別して捉えられていることは明らかである。

でね。私はだいたい病院でなきゃ出産できないんだけど、そうやって N（長女）が生まれた。知らせを聞いた夫がラムに来てくれた。それで私は祖母の家を出て、この家に移って夫と生活したんだ。

2 人目の子のときも同じように大変だった。満 4 ケ月[36]になると急に手術をしなくちゃいけなくなった。妊娠して満 4 ケ月で手術をして、その子は男の子だったんだけど、亡くなってしまったよ。しばらくして 6 ケ月を過ぎたら、3 人目の子 M（次女）を身ごもった。この子もまた帝王切開だったね。毎回のことだけどまた具合が悪くなって、手術を余儀なくされた。夫がこう言ったくらいだよ。

「もう子どもはいいよ」

それから子どもを作らなくなって今に至るよ。

今は 46 歳か 47 歳かそのくらいになる。結婚したとき私は 10 何歳かそこらだった。そんな年齢で結婚したんだ。初潮を迎えたら、その後また月経が来ることはなかった。初潮を迎えたら夫と結ばれて、夫と結ばれたら初潮の次の月経は来なかった。N（長女）がお腹にできたんだ。私と N（長女）は見た感じまるで姉妹だよ。同じような年ごろだからね。

「あの子と E は同年代だ」

娘ではあるけど同じ年代なんだよ。幼いときに出産したから、自分の子どもではあるけど同じ年代、同じような年ごろになる。同年代、同じ年ごろ、きょうだいみたいだってことさ、こういうふうに言ってね。

「おい、あの 2 人同じような年だぞ[37]」

私が幼いときに出産したから、私らが同じような年に見えるんだ。

3. おわりに

本稿では、夫との結婚生活と出産に関する E 氏の語りを紹介した。夫との死別などについては稿を改めるため、以下では本稿での彼女の語りにおいて注目すべき点を述べることとする。

ラムでの夫の稼ぎが十分ではなく満足に食べていくこともままならない E 氏は、養育者の女性に生活費の援助を求める。経済的余裕のない状況の中で、E 氏一家は養育者の女性の援助に支えられながら暮らしていた。結婚生活で問題を抱えた場合、ラムの女性は自らの実家[38]に助けを求めることが多い。E 氏のように、家計が逼迫した際に

---

36) ラムでは、妊娠期間については満月数で数えることが一般的である。妊娠後満 4 ケ月を日本では妊娠 5 ケ月と数える。

37) 親子であるにも関わらずお互いの年齢が近いという驚きを込めた第三者の発言であることを示している。

38) 子が養育期間のすべてを実の親のもとで過ごすとは限らず、祖母や親戚などに養育されることはラムでは珍しくない。また、養育期間を複数の家庭で過ごすこともある。本稿での「実家」

女性が自らの実家を頼る場合もあれば、その逆に実家の母親が、すでに結婚した娘のもとを訪れ生活費を請うことも珍しくない。経済的に援助を差し出す側になるか、あるいは受け取る側になるかは双方の状況によって変動する[39]。

経済的な面だけでなく、結婚後の女性とその実家は、互いの必要に応じてさまざまな形で援助をし合う。女性が出産を迎える際には実家に戻り、夫と別居あるいは離婚した場合には実家がその女性の受け入れ先となる。E 氏の語りにおいても、出産の際には養育者の女性の助けを得ていたと述べられている。

その一方で、養育者の女性の方も E 氏の助けを借りて生活していたことが語られている。結婚後に E 氏をラムに残してタンザニアに旅立った夫が、やはり夫婦でともにタンザニアに移り住もうと提案し、養育者の女性には自分で生活をしてもらおうと E 氏を説得する。この「自分で生活をする」という言葉は、養育者の女性が経済的に E 氏に頼っていたことを意味しているのではない。小商いを長年営んでいた養育者の女性にはある程度の経済力があり、生活に困窮していたわけではない。彼女が E 氏に頼っていたのは、日々の家事、特に食事の準備である。結婚をして家を出た後も、E 氏は自宅で調理した食事を養育者の女性のもとに届けていた。夫の説得の言葉からも、結婚後に E 氏がすぐにラムを離れなかったのは、養育者の女性を一人残すことができなかったからであろうと推測できる。ラムでは女性が一人暮らしをしたり一人で外食をしたりすることは一般的ではない。また高齢な女性ほど調理作業への関与は減少し、同居する娘や孫娘などの女性が調理を担当する傾向にある[40]。調理を任せられる女性と同居をしていない場合は、その都度他の家庭を訪れて食事を摂るか、E 氏の養育者の女性のように自宅に食事を届けてもらうことになる。

これまでに述べたように、女性とその実家との関係は結婚後も密接に保たれることが多く、日常的な交流は主に母親、娘、姉妹など女性同士の間で行われる[41]。ここで、

とは血縁関係に基づくものではなく、養育をされた本人にとって最も重要な拠り所となる家庭を指す。また「母親」については、特に説明がない限り実母と養母の両方を含むものとする。

[39] 男性とその実家の関係に置き換えた場合、男性は援助を受け取る側ではなく差し出す側であることを絶えず期待される。男性自身が実家に経済的な援助を求めることは自らの甲斐性のなさを露呈することであり、体面を保つには避けたい状況である。妻にとっての夫と実家にとっての息子という 2 つの立場にある男性は、妻子を養うとともに、自らの実家が望めば経済的な援助を差し出す必要も生じる。しかし両者を満足させることは容易ではなく、男性の収入を取り合って妻と男性の実家が揉める原因にもなりうる。実家から経済的な援助を求められる場合、直接的な申し出は父親ではなく母親、時には姉妹から受けることが多い。

[40] E 氏と同時期にラム在住の C 氏（調査時 60 歳代）や D 氏（調査時 70 歳代）にもライフヒストリーの聞き取りを行った。調査時に彼女たちが自らの食事を調理することはほとんどなく、高齢の女性は食事を用意してもらうものだと語っていた（井戸根 2012:32、2018:127）。

実子を持たない女性が親戚や知人の娘を引き取り、ある程度成長してからはその娘に家事を任せることは珍しくない。E 氏を引き取った養育者の女性や C 氏がこの例に該当する。

[41] ラムの女性とその実家との関係が、ラム出身者以外の者の目にはどのように映っているのかを示す発言を紹介する。ラムに移り住んで 7 年程になるケニア内陸部出身の男性によると、ラ

ラムと同じくケニア沿岸部に位置するモンバサの旧市街（Old Town）[42]での調査結果を紹介する。当該社会における価値観や倫理観について長年の調査を行ったスワルツは[43]、住人へのアンケートやインタビュー、参与観察を行い、核家族における夫婦関係や親子関係について考察した（Swartz 1991）。表 1 と表 2 はいずれも精神的な絆について問うものであるが、この質問に対して、家族内で立場の異なる四者（父親、母親、息子、娘）がそれぞれ回答している[44]。表 1 では夫婦と親子、表 2 では父子と母子を比較して、どちらにより強い精神的な結びつきが存在するかが示されている。

表 1. 「旧市街の家庭では、夫婦関係と親子関係のうちどちらがより深い愛情で結ばれていますか[45]？」

回答者の続柄	夫婦（%）	親子（%）
父親	36.6	63.6
母親	28.6	71.4
息子	38.5	61.5
娘	20.0	80.0

（Swartz 1991:259）

ムでは結婚後も頻繁に自分の実家を訪れ、夫婦間の諍いや問題を隠すことなく母親に話す女性が多い。これは彼には受け入れ難い習慣であり、夫婦としてやっていくのはラムの人間同士でなければ無理だ（*Wanawezana wenyewe kwa wenyewe*）と語った。

[42] 住人の大多数がスワヒリ語を母語とするムスリムで、ラム群島出身者、その子孫あるいは親戚は少なくない。男女の役割に関してはラムと同様の考え方が共有されており、夫は妻子の生活費を稼ぐこと、妻は育児や家事に勤しむことが主な役割だと考えられている（Hirsch 1998:96-99、Shepherd 1987:244-245、Swartz 1991:242-267）。しかし他の地域でも見られるように近年はラムやモンバサでも、実現できるかどうかは別として、女性が男性と同じように教育を受け職に就くことは重要であると一般的に認識されている。また、社会活動に参加する女性は以前より増加しており（井戸根 2011、Fuglesang 1994、Hillewaert 2020）、女性が社会に向けて発信することの重要性を主張する声や（井戸根 2022:114）、男性も育児に積極的に参加することが必要であるという声も聞こえる。その一方で、妻に収入がある場合でも、夫は可能な限り生活費を負担することが当然だと考えられている。

[43] 1975 年から 1988 年までの間に 8 度調査に訪れ、延べ 24 ケ月間滞在した（Swartz 1991:x）。

[44] 回答者は旧市街に居住し、スワヒリ語を母語とする。スンナ派シャーフィイー法学派のムスリムで、男性 25 名、女性 26 名の計 51 名からなる。いずれも親と子で構成される核家族の一員である。核家族の内訳は、親 2 名＋子 1 名が 9 世帯、親 1 名＋子 2 名が 8 世帯である（Swartz 1991:102-105）。続柄別の回答者数や年齢層など明らかではない部分があるが、家庭内での立場によって表れる回答の違いは夫婦関係や親子関係を知る上での参考となる。

[45] 原文は次の通りである。*"In families around here (i.e., in Old Town), is there more love between wives and husbands or between parents and children?"*

表 1 では、回答者が四者のいずれの場合でも、夫婦よりも親子の方が強い絆で結ばれていると考えている人が多い。中でも母親や娘といった女性の回答者は、父親や息子といった男性の回答者と比べると、親子関係により深い愛情を求める傾向が見られる。

表 2. 「子が親を思う気持ちは、母親と父親のどちらに対しても平等に向けられるべきですか？それともどちらかに対する気持ちの方が上回るべきですか[46]？」

回答者の続柄	平等（%）	母親（%）	父親（%）
父親	100.0	0.0	0.0
母親	80.0	20.0	0.0
息子	64.3	35.7	0.0
娘	54.5	36.4	9.1

（Swartz 1991:254）

表 2 でまず最も目を引くのは父親の回答である。父親は、子が親を思う気持ちには父母の区別はないものだと全員が答えている。回答結果には本音と建て前の両方が含まれていると考えられるが、いずれにしてもこれは模範的な回答だと言える。母親に関しても、80%が父親への気持ちと母親への気持ちは平等であると回答をしている。その一方で、残りの 20%は、父親よりも母親に対する気持ちの方が上回るべきだとしている。これは我が子には父親よりも母親を慕ってほしいという回答者自身の願望が反映されているとも言える。

回答者が娘あるいは息子である場合、親を慕う気持ちは父親と母親のいずれに対しても平等であるとする回答は、回答者が親である場合よりも低くなる。また、両親に対する気持ちのどちらかを優先する場合、母親を選択することが多い。さらに娘を除く三者において、子は母親よりも父親の方をより大切に思うべきであるとする回答は皆無である。娘の回答においても、父親を選択しているのは 9.1%にすぎない。

ラムで実施した本稿の調査時に、結婚経験を有する 30 歳代から 70 歳代の女性 30 名の協力を得て[47]幾つかの質問を行った。そのひとつが、夫と離婚をすべきか迷った際にまず誰に相談をするかといった問いである[48]。これに対して実母あるいは養母と答えたのは 22 名であった。それ以外では祖母、姉妹、女性の友人が回答として挙げられ

46) 原文は次の通りである。*“Should children love their parents the same, their mother a little more, or their father a little more?”*
47) 本稿の調査協力者 E 氏、前述の C 氏や D 氏を含む。
48) 回答に夫と子は除くものとし、夫婦の間に子がいる場合は幼児と仮定している。

たが、父親、祖父あるいは兄弟と回答した女性はいなかった。夫婦に関する問題については同性の年長者の意見に耳を傾けやすいといった見方ができるが、娘は父親よりも母親の方が私的な事柄を話しやすいと感じていると言えるだろう。

モンバサやラムでのこれらの調査結果は、子と父親よりも子と母親との精神的な結びつきの方が強いことを示唆している。子は母親を大切に扱い尊重すべきであるという考え方は、イスラームにおいても説かれている[49]。ただ子が父親よりも母親に親しみや愛着を感じる傾向にあるのは、イスラームの教えに従うこと以外にも幾つかの要因が考えられる。

モンバサの旧市街とラムのいずれにおいても、育児に直接的かつ日常的に深く関わるのは母親である。子の養育環境を整えることは父親の責任とされているが、実際に日常的な育児に携わることを意味するわけではない。父親が負うべき責任は、養育費を負担し、子が衣食住に不自由のない生活を送ることができるよう配慮をすることである。また、イスラームの規律の下では男女の生活領域が異なり[50]、娘は異性である父親よりも同性である母親と行動をともにすることが多い。娘が成長するにつれてこの傾向は強まる。こうして、親子関係の中でも娘と母親はより親密な関係となりやすい。さらに家長としての威厳を重んじる家庭では、子にとって父親は母親ほど身近な存在にはなり難い（Swartz 1991:242-267）。

E 氏は生後まもなく養育者の女性に引き取られ、結婚を迎えるまで生活をともにした。実の両親はモンバサで暮らしていたが婚礼行事はすべてラムで行い、出産時には養育者の女性のもとに身を寄せた。養育者の女性は自らの稼ぎによってある程度の経済力を有しており、結婚後の E 氏一家への住まいの提供や生活費の援助が可能であった。E 氏にとって彼女は精神面と物質面の両方で頼りとなる存在であり、母親としての役割と父親としての役割の両方を果たしていたと言える。そしてまた実子のいない

---

49) イスラームの聖典クルアーンや預言者の言行集であるハディースでは、母親への敬意を強調する一節が幾つか見られる。本稿で引用・参照するクルアーンについては井筒訳（1993）による。また、以下に引用されているハディースは、*Saḥīḥ Muslim* [kitāb al-barr wa-al-ṣilah wa-al-ādāb] である。

> *およそ人間たるもの、己が父母にはやさしくしてあげねばならぬ。これは我ら（アッラー）のきつい戒めであるぞ。母親は苦しんで胎に宿し、苦しんで産んでくれた。胎に宿してから乳離れさせるまでに三十カ月もかかっている。*（クルアーン第 46 章第 14 節）

> *ある男が預言者に、最も親しくすべきなのは誰なのかを尋ねた。すると預言者は言った。「お前の母親である。そのつぎも母親である。そのつぎも母親である。そしてそのつぎに父親である」。*（小野 2019:121）（ムスリムのハディース）

50) 学校教育の場など、男女が空間を共有する機会は増加している。性別によって空間を区別する規律は徐々に緩まりつつあるが、一定の区別は残っている。

養育者の女性にとっても、身の回りの世話などを任せられる E 氏は心強い存在であっただろう[51]。

参考文献

井筒俊彦訳. 1993.『コーラン（上）・（中）・（下）』岩波文庫.

井戸根綾子. 2011.「女性グループとマエンデレオ　-ラムの一女性の「語り」から-」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 22 号, 25-45.

——. 2012.「ラムの女性が語るライフヒストリー（1）」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 23 号, 23-47.

——. 2015.「ラムの女性が語るライフヒストリー（2）-1」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 26 号, 79-98.

——. 2016.「ラムの女性が語るライフヒストリー（2）-2」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 27 号, 82-100.

——. 2017.「ラムの女性が語るライフヒストリー（2）-3」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 28 号, 56-71.

——. 2018.「ラムの女性が語るライフヒストリー（2）-4」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 29 号, 121-134.

——. 2019.「ラムの女性が語るライフヒストリー（3）-1」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 30 号, 49-66.

——. 2020.「ラムの女性が語るライフヒストリー（3）-2」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 31 号, 17-34.

——. 2021.「ラムの女性が語るライフヒストリー（3）-3」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 32 号, 67-82.

——. 2022.「ラムの女性が語るライフヒストリー（3）-4」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 33 号, 101-118.

小野仁美. 2019.『イスラーム法の子ども観』慶應義塾大学出版会.

シュトローベル、マーガレット（富永智津子訳）. 2006.「東アフリカ沿岸部における奴隷制と女性」富永智津子、永原陽子編『新しいアフリカ史像を求めて』第 6 章, 191-220. 御茶の水書房.

戸田真紀子. 2013.「民族的少数派の抑圧と植民地化の遺産－ケニア共和国北東州の事例を中心として－」月村太郎編『地域紛争の構図』第 3 章, 75-96. 晃洋書房.

——. 2018.「テロを生み出すもの：「我が家」を奪われたケニア北東部のソマリ人の歴史を事例として」『關西大學經濟論集』第 67 巻 4 号, 541-562.

[51] 実子のいない女性が子を引き取り養育することに関する考察は、井戸根（2019）を参照されたい。

富永智津子. 1994.「ザンジバルの女性と文化－成女儀礼・踊りと歌」『キリスト教文化研究所研究年報』第 27 号, 73-100.

——. 2001.『ザンジバルの笛－東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化－』未來社.

Bailey, Roland. 1996. “A Fishy Story. Thirty Years on at Nyumba ya Mungu Reservoir” *Tanzanian Affairs*, 53, 20-21. https://www.tzaffairs.org/wp-content/uploads/pdf/tzaffairs_53.pdf（2023 年 1 月 4 日閲覧）

Brunotti, Irene. 2005. “Ngoma ni Uhuni? Ngoma za Kisasa Mjini Zanzibar” *Swahili Forum,* 12, 161-171.

Denny, Patrick. 1978. “Nyumba ya Mungu Reservoir, Tanzania: The General Features” *Biological Journal of the Linnean Society*, 10(1), 5-28.

Fair, Laura. 2001. *Pastime & Politics*. Athens, Ohio University Press.

Franken, Ann Marjorie. 1986. *Anyone Can Dance: A Survey and Analysis of Swahili Ngoma, Past and Present.* Ph.D. Dissertation. University of California.

Fuglesangu, Minou. 1994. *Veils and Videos -Female Youth Culture on the Kenya Coast*. Stockholm, Stockholm Studies in Social Anthropology.

Gearhart, Rebecca. 1998. *Ngoma Memories: A History of Competitive Music and Dance Performance on the Kenya Coast*. PhD Dissertation. University of Florida.

Hillewaert, Sarah. 2020. *Morality at the Margins -Youth, Language, and Islam in Coastal Kenya*. New York, Fordham University Press.

Hirsch, Susan F. 1998. *Pronouncing & Persevering: Gender and the Discourses of Disputing in an African Islamic Court*. Chicago, The University of Chicago Press.

Larsen, Kjersti. 2008. *Where Humans and Spirits Meet - The Politics of Rituals and Identified Spirits in Zanzibar*. New York and Oxford, Berghahn Books.

Le Guennec-Coppens, F. 1983. *Les Femmes Voiles de Lamu, Kenya*. Paris, Editions Recherche Sur les Civilizations.

Middleton, John. 1992. *The World of the Swahili- an African Mercantile Civilization*. New Haven and London, Yale University Press.

Mirza, Sarah and Strobel, Margaret. 1989. *Three Swahili Women*. Bloomington, Indiana University Press.

Nurse, Derek. 2010. *Bajuni: people, society, geography, history, language*. Memorial University. https://www.mun.ca/linguistics/media/production/memorial/academic/faculty-of-humanities-and-social-sciences/linguistics/media-library/more/e-books/Bajuni%20database.pdf（2023 年 1 月 4 日閲覧）

Olali, Tom. 2008. *Performance of a Swahili Poem During the Lamu Maulidi Festival*. Nairobi, Sahel Books Inc.

Prins, A. H. J. 1967. *Swahili-Speaking Peoples of Zanzibar and the East African Coast*. London, International African Institute.

——. 1971. *Didemic Lamu*. Groningen, Instituut voor Culturele Anthropologie der Rijks Universiteit.

Senoga-Zake, George W. 2000. *Folk Music of Kenya*. Nairobi, Uzima Press.

Shepherd, Dill. 1987. "Rank, Gender, and Homosexuality: Mombasa as a Key to Understanding Sexual Options" in: P. Caplan (ed.) The Cultural Construction of Sexuality, 240-270. London, Routledge.

Skene, R. 1917. "Arab and Swahili Dances and Ceremonies" *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 47, 413-434.

Stiles, Erin E. and Thompson, Katrina Daly (eds.). 2015. *Gendered Lives in the Western Indian Ocean*. Athens, Ohio University Press.

Strobel, Margaret. 1979. *Muslim Women in Mombasa 1890-1975*. New Haven, Yale University Press.

Swartz, Marc J. 1991. *The Way the World is. -Cultural Processes and Social Relations among the Mombasa Swahili*. California, University of California Press.

Timammy, Rayya. 2010. *Mombasa Swahili Women's Wedding Songs*. Saarbrücken, VDM Verlag Dr. Muller GmbH & Co. KG.